

C—18 江戸時代における裁縫教育について

(第4報)

—「裁物秘伝抄」相応裁の法の検討—

郡山女大家政 関口 富左

1. 本研究は被服工作技術と諸能力並びに性格特性との相関等従前の研究をさらに教育史上において実証すべく、江戸時代裁縫書を中心として検討し、裁縫教育の知的価値を究明する。

2. 本回は元禄3年刊行「裁物秘伝抄」として現存せる最古の裁本を資料として、序文、裁方法等の検討により、上記の検証をすすめる。

3. ◎身丈を基準としてこれに相応数を乗じ、身幅、衿丈、衿幅、衽丈、上下衽幅、袖丈等の算出により、算数能力の刺激を与える。

◎同上算出せる各部布形状を図示し、視覚的形狀把握をねらい、衣服構成に到る過程として裁物を扱う。しかし衣服形態の分解的思考より総合への展望も意図され、図形認識による構成要素の確認がはかられている。

◎裁寸法 26 種の割出しにより、各部布形状を当時の多様な布幅物に無駄なく「はめ込む」ことの案出により、部分形状と布形状の比較検討により、空間的知覚が練磨される。

尚、300年前の裁物本における思考方法が、身体発達に相応すべき衣服寸法の案出であり、しかも「ついえなく」とて裁断法の最重要点なる Moulding について記されていることは驚異である。